榎地区地域だより
2020年（令和2年）7月14日発行（年4回発行）
No.74

編集・発行
榎町地域センター管理運営委員会 広報部
〒162-0042 新宿区早稲田町85
☎ 03-3202-8585
URL http://www2.odn.ne.jp/~hak91920/

ENOKI えのき

地域コミュニティの核としてまもなく20周年

区内に地域センター（当初は区民センター）の第1号が誕生したのは、平成元年9月5日にオープンした「角筈区民センター」です。以来10番目の「戸塚地域センター」がオープンするまでに22年の歳月を要しましたが、現在に至るまで近隣地域のふれあい、そして区民の連帯感の醸成に大きな役割を果たしてきました。

榎町地域センターは、旧榎町特別出張所跡地に1階は榎町特別出張所、地下1階及び2階から4階は榎町地域センターとして平成14年4月1日にオープンしました。開設にあたっては地元住民代表の方たちで構成される管理運営委員会準備会（現榎町地域センター管理運営委員会）が地域センター各階の設計と使用基準の検討などを行いました。

センターには用途に応じて様々な部屋があります。4階の「多目的ホール」は軽スポーツ、会議、コーラス発表会、ピアノ演奏など様々な形態でご利用いただける小さな体育館のイメージです。3階には会議にも利用できる「調理室」、会議に最適な「大会議室」、会議や書道などにもご利用いただける「工芸美術室」、そして当センターで一番人気のある「軽音楽室」、ここではピアノの演奏・カラオケなどもお楽しみいただけます。2階には受付業務などを行う事務局、茶道・華道、舞踊、ヨガなどでご利用いただける「和室」、少人数でのご利用に最適な「小会議室」、そして、印刷機やコピー機のある「印刷室」、どなたでもご利用いただける「談話コーナー」があります。そして、地下1階には「葬儀ができる多目的ホール」があり、区民の方の葬儀でご利用いただけます。なお、葬儀がないときには、一般の会議室と同様に利用することができます。

このように幅広い用途で安価に利用できるのが地域センターです。今後もより多くの皆様にご利用いただきますようお願いいたします。ご利用は基本的には地域のコミュニティ団体が優先されますが、施設に余裕がある場合には一般の方もご利用いただけます。詳細は「榎町地域センターホームページ」をご覧いただくかお問い合わせください。

地域センターは貸館業務の他に「地域センターまつり」「カラオケ大会（年2回）」「えのき寄席（年2回）」「ミニ音楽祭」「体操教室」などの事業も行っており毎年多くの皆様にご参加いただき好評をいただいています。詳細はホームページをご覧ください。

表題にも書かせていただきましたが、当地域センターは令和4年4月には20周年を迎えますが、これもひとえにご利用いただいた多くの皆様並びに運営に携わってこられた地域の皆様のたゆまぬ努力のおかげです。改めて感謝を申し上げるとともに、これからの新たな20年に向けて事務局一同努力してまいりますので、よろしくお願いいたします

最後になりますが、現在、センターの運営に携わっている管理運営委員会のメンバーも多くの方が高齢になられています。この記事をご覧になり会の運営に興味をおもちになった方、地域センター祭りの運営に関心のある方は是非事務局までご連絡ください。皆様の参加をお待ちしています。宜しくお願いいたします。

連絡・問い合わせ先
榎町地域センター管理運営委員会事務局
新宿区早稲田町85番地
☎3202-8585

我が町

9 喜久井町

喜久井町は南北に500m程ある細長い町です。馬場下町に接する北側は、店舗・会社・マンション等が多く、弁天町に接する南側は趣も変わり、昔ながらの下町風な閑静な住宅街になっており、二つの違う面を持った親しみのある暖かい町です。

町内所在地(20番地)にある新宿区立牛込第二中学校(昭和22年設立)の校歌の中にも「♪喜久井の丘に風かおり～♪」と歌われています。

「夏目漱石」

東京メトロ東西線「早稲田」駅の近くに、文豪夏目漱石の生誕の地があります。

早稲田南町の漱石山房記念館と共に生誕の碑を見学にいつも多くの皆様が訪れています。漱石の父であり当時名主として采配を振るっていた夏目小兵衛氏が明治2年に近隣の6ケ町を合わせて新町名を夏目家の家紋より「喜久井町」と命名し、同家の前の坂を「夏目坂」と称し、ここに我が町が誕生しました。

「池立神社」

町内の中央には、江戸時代から続く松平家に鎮座されていたのを、明治22年に公的な神社に昇格し、現在地に移転鎮座され、昭和4年に神社の維持・管理・祭典を当町が引き継ぎました。以降毎月4日にお祭りをしております。本社は三河の国(現愛知県)知立神社です。

現在では、社務所が町内行事また町会の方々の親睦と憩いの場として、利用されています。

「喜久井町観音像」

昭和20年5月25日、早稲田大学理工学研究所にありましたL字型防空壕に近隣の住民及び学生が入り、300余名(内喜久井町在住104名)が火焔と煙につつまれ、悲しくも尊い命が犠牲になりました。翌年より感通寺住職によって慰霊祭を行い、近年では早稲田大学と合同で毎年5月25日近隣の方々、ご遺族の方々、多くの方々と共に永遠の平和を祈願して戦災物故者慰霊祭を行っています。

早稲田大学理工学研究所内に観音像と感通寺内に観音像と犠牲になったお名前を記した慰霊の石碑があり、いつでもご自由に参拝できます。

感通寺　内

夏目漱石・石碑

早大理工研　内

池立神社

町会役員・婦人部・青年部・白寿会(高齢者クラブ)そして会員皆様と共に由緒歴史ある町をいつまでも守っていければと思っています。

夏目漱石先生と 早稲田南町の山房 ❷

漱石先生は明治四十年九月、本郷の西片町から早稲田南町七番地の漱石山房に移られ、その一室で明治四十一年に「三四郎」、四十二年に「それから」、四十三年には「門」、脱稿年は不詳ですが、「坑夫」そして四十五年には「彼岸過迄」と、次々と創作活動を続けられたのでした。

五女の雛子さまを幼くして亡くされた御傷心の程は「彼岸過迄」を明治四十五年一月、此作を朝日新聞に公にした時の附言として

―「彼岸過迄」というのは元旦から始めて、彼岸過迄書く予定だから単にそう名づけたまでに過ぎない、実は空しい標題である―

と、さりげなく述べられておられますが、後年、先生の遺稿として特筆とされる「日記」の中には―吾胃の腑にも罅入りて―との限り無い親心が伺われる次第でありまして、まことに漱石先生らしいと申上げるほかはございません。

大正三年「行人」を執筆されたのですが御持病の胃潰瘍の為中止。

大正五年「明暗」を起稿されましたが、ご病状が悪化の一途をたどられまして中絶の已む無きに至り、同年十二月九日、行年五十才の御若さで他界せされました。

明治四十年九月、本郷の西片町から早稲田南町の漱石山房に移って来られ、再び牛込の住人となられた先生は、喜久井町一番地に御生家を訪ねられた折の懐旧の御心情は「硝子の中」の左の一文により伺い識ることができます。

―門には思いも寄らない下宿屋の看板が掛っていた。私は昔の早稲田田圃が見たかった。しかしそれはもう街になっていた。私は根來の茶畠と竹藪とを一目眺めたかった。然しその痕跡は何処にも発見することが出来なかった―

根來とは江戸時代、牛込原町の周辺に在った組屋敷の跡地で其処も金之助（先生の本名）少年の格好の遊び場所であったのです。

早稲田大学の発展と近隣商店街の繁栄とは由緒有る夏目家の建物とても容赦することなく下宿屋に変貌せしむる仕儀と相成った次第です。

漱石公園の入口に六、七年前まで、渡辺サツさんと申される、当時で八十の坂を二つ三つ越された老婦人が娘さん夫婦と小奇麗な二階家を建てて住んでおられたのを御存知の方も多いことと存じます。訳あって中目黒方面に転居されましたが、このサツさんの御姑に当る某女は長い年月を夏目漱石家の女中さん（家事手伝い）として勤め上げられた人であります。

先生が本郷の西方町に居を構えて居られた頃の第一作「吾輩は猫である」の文中、先生が主人公格の猫の言葉をかりて

―わが家の女中氏は暮も正月も同じような顔をして羽根を突いている―と評されました女中さんのモデルとなった御人であろうと推察されます。御姑さん某女の人柄がよく表現されているのが面白いと思います。

この御縁に連なり嫁さんのサツさんが旧漱石山房の一部をお役所から借用することになったとのことです。

筆者の亡母志ん（昭和十九年七月五日没）は御姑さん某女の女中さん当時から良く知っていたそうで、生前の昔話しによりますと、明治から大正にかけても我家は米屋を営んでおりましたが、当時の店には電話が未だ設置されておらず、漱石家の女中さん（サツさんの御姑）や時には鏡子様（漱石夫人）が米の配達を促しに店頭までお見えになったそうです。

伯父の磯崎豊次郎氏は榎町の宗伯寺（釈迦堂）の門の西隣り脇に山田屋という商号で履物商の店舗を構えておりました。漱石夫人が京都の西陣織りとか九州産の佐賀錦などをわざわざ現地から取寄せた上、これを表地として婦人物の草履を造るようにと特別注文されるので、最高級の御得意であったと話してくれました。

漱石先生は鏡子様と御一緒で夕方から神楽坂辺へ御散歩によくお出かけになりましたのだそうで、御帰宅のとき夫人だけが店の奥の小部屋まで上って来られて伯母相手に世間話しなど興ぜられ茶菓など召上って御帰りになるのがならわしであったと従兄たちが話してくれました。

先頃、漱石公園の猫塚の前に先生の胸像が完成し建立されました。まことに見事なブロンズ像で、則天去私の金色の文字彫刻も殊更爽やかな感銘を覚えます。御生家の在った夏目坂の方角に向けられて銅像は安置されました。泉下の先生も定めし御満悦のことと拝する次第でございます。

平成三年三月、漱石山房に夏目漱石の胸像が建立されました。

本文は山中英治氏（故・榎町在住）が建立記念に執筆されたものです。

えのき文芸

俳句

蛍の夜天空の宿夜景かな
大籠　紀子

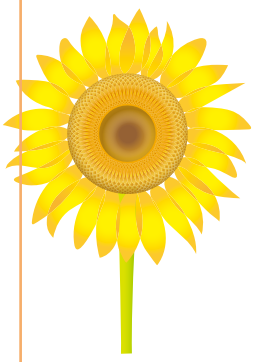
老夫婦晩酌早し冷奴
加藤　千代子

夏近し八十八夜の新茶来る
原　綾

お神輿も夜店も出ない夏祭り
滝口　泉

青梅の香り楽しみ塩をふる
山口　敏子

窓辺には朝の光とアマリリス
持主　次郎



川柳

娘孫家でビジネス腹に肉
愛あれど気力体力底をつき
大籠　紀子

喧嘩して何が得なの北南
お隣へ行っても良いと許可が出た
管野あきら

手順踏みステップアップ試みる
コロナ後は羽根を伸ばそう思い切り
小山　一湖

明日から自宅待機と言われても
草刈も野花の前で手が止まる
田実　孜

ミサイルや核兵器などコロナが嗤ふ
青木　久彌

好きな酒ステイホームで昼間から
滝口　泉

短歌

五月晴いきなり初雷轟きて
コロナウイルス叱りつけたり
青木　久彌

蛍狩り小さな灯籠の中
ゆらして燃やす傘寿のわれも
大籠　紀子

土塀続く青草むらの夕ぐれて
はぐれ蛍の光さみしき
加藤千代子

マスクごし挨拶すれば訝しがられ
はずしはじめて誰と気がつく
金成　光祥

色毎に姿を変える紫陽花は
お洒落な若い女性達かな
滝口　泉

野の蕗をふつふつと焚くふつふつと
明日待たるるお茶漬けの味
中村　道雄

山峡のトンネルぬけて辿りつく
水芭蕉咲く落人の里
山口　敏子

広報部からのお知らせ

広報誌「えのき」に関するご意見やお問い合わせ、情報提供など榎町地域センター事務局までお寄せ下さい。

「えのき」文芸に掲載の作品を募集しています。次号の俳句のお題は『秋』、川柳は自由吟です。

投稿はハガキかファックスに、俳句川柳の別を明記の上、9月10日(木)までに榎町地域センター事務局迄お送りください。

榎町地域センターからのお知らせ

令和2年度「榎町地域センター管理運営委員会定期総会」は新型コロナウイルス感染症の拡大防止という観点から、書面表決といたしました。

平成31年度事業報告、決算報告、監査報告、令和2年度事業計画案、同予算案、および榎町地域センター管理運営委員会事務補助員就業規程の一部改正が全て議決されました。

〒162-0042
新宿区早稲田町85
TEL(3202)8585
FAX(3202)2478